
ストーリー・ギア

plant

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーリー・ギア

【Nコード】

N3864BA

【作者名】

plant

【あらすじ】

広大な土地に佇む学園。

その学園はただの学園ではなく、超人養成学校だった――

その学園の生徒管理はとても厳しく、学園土地外に出ることは禁じられている。

その学園の秘密探るべく、風使いの青年が闘う！

1st story

場所も秘密の、ある学園こと。

教室では生徒達が忙しく勉学に励んでいる。

そこで、一人の少年が消しゴムを落としてしまった。
少年は反動で、すぐ床に手を近づける。

床に手がつく前に、黒い手袋の手に腕を力強く掴まれた。

「許可を取らずに不穏な動きをとったな？」

その野太い声に少年は心臓が挟られるような感覚に囚われ、少し呆氣にくれる。

「す、すみません！今からでも許可を・・・」

「もう遅い。・・・お前はマイナスポイントだ。」

そう言つて黒い手袋を履いた男は、腰にぶら下げていた大きな辞書のような物を開き、ページを大げさに探している。

そして、あるページで、指をなぞり、指をさしたまま目だけを少年に向ける。

「お前・・・」

少年の額に汗が流れる。

「今回でマイナスポイントが50ポイント溜まってしまったようだな」

「！！・・・お願いします！今回は見逃してください！なんでもします！お願いします！！」

少年は床に手を付き、頭が床につくほどの土下座をした。

周りの人達はこちらには目もくれていない。

「残念だ。お前は今日から3ヶ月、”鬼の間”での生活をしてもらう」

「そんな・・・そつ、んな！嫌だ嫌だ！！絶対嫌だ！僕はいかな
いぞ！！」

少年はその場で泣きつき、机の足にしがみつく。

「逆らうとはな、いい度胸だ。」

少年は一瞬笑顔になった。希望をもった笑顔だ。

そして男は、トランシーバーのような物を胸からはずし、口元に当てた。

「違反常習者を”鬼の間”に転送する。期間は1年だ」

トランシーバーからは声は鳴らず、プツンと切れた。

それを聞いた少年は魂がぬけたような顔をしている。

その男は少年の額に掌をあてた。

そうすると少年はその場から砂が散るようにして消えた。

そして、男もそのように消え、教室の後ろの椅子の元に現れた。

そうしていると鐘が鳴った。授業終了の鐘だ。

先生が片手を上げると、生徒達は立って、礼をした。

そして生徒達はまた座った。

このやり取り授業の始めと終わりにするのがこの学園のルールなのだ。

生徒達は会話を交わすことは無い。

この一風も二風も変わった学園に革命を起こそうとする少年がいた。
その少年の名は「アギト」

1st story (後書き)

まだこれは序章、的な物です。

次回から主人公や取り巻きの人物達の物語が始まる。。。といった感じですよ。

ちなみに”鬼の間”については、物語が進むにつれて詳細が明らかになります。

1st story 第一話 落とした手帳

学校の授業が全て終わった、いわゆる放課後と言う時間、生徒達は掲示板の前に集まっていた。

その掲示板には、先日に”鬼の間”に転送された人物が書いてあるリストが貼られていた。

「やっぱりあいつは転送されたか・・・」

「あいつは終わった・・・」

など、小声で会話がされている。

その一番後ろの青年もまたその掲示板を見ていた。

しかし、彼は皆がみている物とは違うものを見ていた。

そう、活動予定表である。

活動予定表とは、組単位での仕事の仕分けなどが鮮明に書かれている。

その青年は明日の活動場所を見てみると、第D区画一階のAフロアであることがわかった。

この学園は広大な土地にA～Zの区画に分けられ、その区画ごとに学園が置かれている。

学年は8年制まである。

区画ごとに監視の厳しさは変わる。ちなみに一番監視の緩いのが、d区画と言われている。

学園を殊更に詳しく言うと、26階まであり、一階の中心にある大きな教室、その周辺がAフロアとなっている。2階になるとBフロア、3階になるとフロア・・・と、階ごとに上がっていく。

突然鐘が鳴り響く。そして一瞬、ノイズが走る。

「完全下校の時間だ。忘れ物をせずに帰るんだ」

大音量で声が鳴り響く。

それと同時に生徒達は帰っていく。

しかし、一番後ろで活動表を見ていた青年はまだ動こうとしない。

しかし、何者かに腕をつかまれ、ひっぱられた。

そして、校舎からでた時、ようやく何者かの動きは止まった。

「！！・・・なんなんだ君は！？」

我に返った青年が大きな声で聞いただす。

「何をいつておりますか！後もう少し遅れてたらマイナスくらってたよ！」

フードをかぶったその人物は高い声で張り合った。

「ぐ、ぬぬ。たしかにそのとおりだな・・・。名はなんという？」

「そちらから名乗るのが筋ではないかい？」

お決まりのセリフを、高い声で言い返すと、青年はむっとしながら答えた。

「アギト、だ。で、君の名前は？？」

青年が名乗ると、その人物はフードを上げて笑顔で答えた。

「私の名前はフローラ！フローラ・エミルドだよ！」

どうやら女性のようなのである。整った顔立ちにアギトもたじろぐ。

「お、おう。そうなのか・・・とりあえず、さつきはありがとう」

「いえいえ！また会う日まで、さようなら！」
手を振りながら走って行ってしまった。

「はあ。帰ろう」

ため息をついて、アギトは帰ることにした。

この学園の生徒達は寮で暮らしている。

一人一つの個室を与えられ、部屋内では快適に過ごしている。

彼らの心の拠り所は、この完全に他人をシャットアウトできる自室なのである。

しかし、区画それぞれに寮があるが、中には部屋に監視カメラを設置されている場所もある。

その辺、アギトの住む区画の寮は、そのような監視もなく、個人の干渉も無いので、恵まれていると言える。

ドアを開けると、自動照明が明るく光る。

「起動」

こう呟くと、部屋は暗くなり、奥にある壁一面が照らし出された。

「キーボード」

とつぶやくと目の前に光で映し出されたキーボードが出現する。

その状態で洗面所に行き、着替え、手を洗い、うがいを済ましてから、照らし出された壁の前の椅子に座った。

自分の腹部あたりをなでるように手をかざすと、先ほど出現したキーボードがまた出現する。

あまり触らないでいると、コンパクトになる、いわゆるスリープモードを解除したのだ。

その光のキーボードを叩くと、壁一面にワードが現れる。

アギトは、毎日日記を書いている。

「今日手に入れた情報は無し、っ」と

彼はワードにそう打ち込むと、日にちを書いてそのプログラムを終了した。

しかしまたすぐにワードを出した。

「新しいプログラム・・・っと」

そして、坦々と文字を打ちはじめた。

「明日の作戦」

明日の授業に1階フロアでの授業がある。その授業終わりに図書室に行き、一般生徒立ち入り禁止ゾーンに潜入したい。ちなみに、1階フロアで行われる授業の担任は図書室の管理人。授業中にカギを奪いたい。」

と打ち込む。

「トライアル開始」

そう言うとき光のモニターはロード中、と表示された。

少し待っていると、トライアル終了と言うバーが出現され、その下に「結果を見る」というバーが出てくる。

「結果を見る」を選択すると、ズラリと文字、グラフが出てきた。

「成功率 20% 成功時の情報収集率 大 失敗時のマイナスポイント 99p」

などとデカデカと表示される。

「ぐぬぬ。リスクが大きすぎるな……。20%にけるしかない……。か」

そう唸っていると、突然隣から声がした。

「ふむふむ。リスクが大きすぎるな」

高い声で、アギトの喋り方を真似したような声だ。

[illegible]

あまりの驚きに椅子から転げ落ちた。

「わ！ やっぱビックリした！ すいません！」

「フ、フローラさんじゃなか！どうしてここに！？」

「いや、あのこれ」

フローラがなにかをアギトに手渡した。

「な、なぜこれを??」

手渡したものは手帳だった。

「いや、さっき別れた時にね、忘れ物に気づいて慌ててもどつたの！学校に！」

アギトはうんうんと頷いている。

「そしたらね！校舎前にそれが落ちてたの！でも中身を見て驚いちゃって、忘れ物どころではなくなっちゃったのよ！それにちょうど手帳の中に君の部屋番号が書いてあってよかったよお！」

アギトがハツと気づいたように我にかえる。

「・・・ってことは、中身をみたのか？・・・見たんだよな、そりや・・・？」

「！・・・ごめんなさい・・・みるつもりは無かったの・・・。でもこれを先生達に見られたら、君は・・・」

フローラがうつむいてみると、アギトが肩に手をかけた。

「・・・ありがとう、また君にたすけられたよ」

その言葉が聞こえた瞬間、フローラは一気に笑顔になった。しかし、この言葉はアギトにとっても勇気のある言葉だ。

「ううん！いいの！きにしないで！・・・それより・・・手帳に書いてあることは本当？」

「えっ・・・と、学園の秘密探査のことか？」

この時はすでにフローラから笑顔は消えていた。

「う、うん。その学園の区画数とか、地下室の存在？とか・・・」

「なあに、この程度ならまだ秘密とは言わないさ。まだなにか大きなことがたくさんあるはずだ」

ブンブンと顔を横に振ったフローラは大声でこう言った。

「いやいや！この作戦とか見てると本当っばいけどさあ！・・・いや、そういう意味じゃなくて！こんなことしているのがばれたら確実に殺されちゃよ！名前すら秘密にするウチラの学園だよ！？」

「まあたしかにな。そうかもしれない。でも、俺はやめることはできない。とりあえず、手帳ありがとう。今日は帰ったほうがいい」
ドアの方向を指差すアギト。

「まってよ！君は一体何にそこまで暑くなっているの！？もうやめ

なよ！こんなこと！バレたら鬼の間どころで済まされることじゃないんだから！」

「さっきも話したとおり、たしかに殺されてもおかしくわない。でも俺にはやらなきゃいけないことなんだ。今日見た全ては忘れてくれ、じゃあな」

その場で下を向いて動かないフローラ。

しかし、なにかをひらめいたように顔を上げた。

「わ、私！君のお手伝いをする！私も知りたい！学園のこと……だから……！」

「いい加減にしろ……！今日話したばかりの君に全てを茶化されたくはないんだよ……！」

彼女が話しているのにも関わらず、彼女よりも大きな声で怒鳴る。

「……私は……どうしてもアギト君が心配なの」

「気持ちだけ受け取っておくよ。本当にありがとう。とりあえず水でも飲んで落ち着こう」

そう言つてアギトが後ろの冷蔵庫に向かおうとしたとき、両手をギョツと掴まれた。

「……？」

「私！本気よ！どんなことがあってもかまわない……！それに私、君と同じ区画、ナンバーだし！」

彼女の本気の目に、アギトは一瞬、迷ってしまったのである。

この決断は後に大きな過ちになるかもしれない……。しかし、慎重に考えている暇などなかった。

「……わかった。わかったが、なにがあらうと責任はとらないかな！」

「やつ、やった！」

フローラはあまりの嬉しさに、その場で尻込みしてしまった。

「そういえば、お前はどんな特殊能力があるんだ？」

ヤレヤレ、と言った感じでコップに水を注いでフローラに渡す。

「私？私は、これ！」

そう言う手持っているコップがみるみる凍りつき、中の水は氷になった。

「冷氣使い？珍しいな」

「そう私！なんでも凍らせれるの！」

そこでアギトは、思い立ったように光のキーボードを叩き始めた。

さっきの作戦にフローラを追加してみるとどうなるのか。

その結果がアギトは気になってしまった。

「シュミレーション開始だ」

またモニターはロードを始めた。

二人はモニターを一言も話さずに凝視している。

そして、結果がでてきた。

「（ゴクリ）」

二人は同じタイミングで唾を飲む。

そしてアギトはつぶやいた。

「成功確率 80%。。。。。」

二人は顔を見合わせ、お互いにびっくりした表情で、同じタイミン

グで頷いた

そして、アギトが画面のほうにまた顔を向け、詳しい結果を眺めている。

「す、すごい！おまえ、なかなかやるな」

「私も正直びつくり！」

その後、アギトは小一時間にわたってフローラに作戦について教えた。

確実に忘れないように、フローラにメモを取らせた。

それを一生懸命に聞いて覚えようとするフローラ。

「うんうん！なるほど！わかったよ！」

「じゃあ明日1階Aフロアで、頼んだぞ？」

アギトはフローラに指を指す。

フローラは、目を見開きながらしずかに頷いた。

また、アギトは立ち上がって玄関に向かった。

「じゃあ、早く今日は帰るんだ、夜道は危険だからな」

フローラはしれっとしながら、アギトに笑顔でこう答えた。

「あっ、おかまいなく！部屋となりだし！」

アギトは二度目の驚き声を張り上げた。

1st story 第一話 落とした手帳（後書き）

今回はここまでです。

正直読みにくい、とか、直したほうがい！など意見募集中です！！

ではさよなら

《おまけ》

くアギトの手帳く

この学園は数百年前に地下室が作られ、放置されていると言つ。

学園禁書引用く

＝アギト 一言日記＝

昨日、まさか今日こんな展開を迎えるなんて、思ってもいなかった
だろう……

くendく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3864ba/>

ストーリー・ギア

2012年1月10日04時46分発行